The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Absalom and Achitophel の satirical method
Author(s)	平井, 隆
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 3, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Absalom and Achitophel の satirical method

平　井　　隆

I

Absalom and Achitophel は，その序文のなかでドライデン自身が暗示しているように，諷刺詩である．この諷刺詩を前にして，諷刺とは何かという問いがまず最初に私に起った．それと同時に，諷刺をどう読むか，言葉をかえてもっと大げさな言い方をすれば，諷刺を研究するとは一体どういうことなのかという問題に私は直面した．そこで，私はまずこの問題について考えていきたい．

そこで，改めて問い直そう．諷刺とは何か？　諷刺はどう読まれるべきか？

この問いに多くの答えがあろう．私は，諷刺が rhetorical construction である，と答えたい．

M・V・ドーレンは，ドライデンの詩が "poetry of statement" である，[1] とうまくいいあてている．彼が指摘するように，ドライデンの詩は，散文的である．（特に諷刺詩はその傾向が大きい．）その特色のため，statement をささえているレトリックは，ともすれば忘れられがちである．しかし，詩が state している内容と同じ程度に，その内容が state される方法も重要視される必要がある．私は，諷刺詩においては，レトリックの方をむしろより重要視さえしている．というのは，諷刺が詩として成立しているのはレトリックの働きにある，と私は考えるので．したがって，諷刺にもっとも必要な研究は技巧を扱ったものである，と私は考える．

そこで，私は，ドライデンの諷刺の技巧についての二・三の観察を以下でこころみたい．ドライデンの諷刺詩のなかでもとくに *Absalom and*

Achitophel を選ぶ．この諷刺詩を選んだのは二つの理由による．その一は，この諷刺詩が有名で，諷刺詩の古典ともいうべきものであること．その二は，この諷刺詩にもっともドライデンらしい諷刺方法があらわれている，と私が考えるので．（ドライデンらしい方法がどのようなものかは後でふれるつもりである．）

II

修辞学的に言えば，諷刺は賞讃と非難のカテゴリーに属する．

「ローマ人の間では」とドライデンは言う，「諷刺という言葉は，悪を非難したり，愚行をあばく書き物にたいしても，善行が称揚されている書き物にたいしても同じように使われた．」[2]またべつのところでは，諷刺詩にもっとも本質的なもので，それに生命を与えている "soul" は，悪をこらしめることであると同時に，善をすすめることである，ともドライデンは主張する．[3]すなわち，ドライデンにとって，諷刺とは，悪への非難と同時に善を賞讃することを意味した．

Absalom and Achitophel に即していえば，この諷刺詩は，二重の層から構成されている．すなわち，vice と folly とを攻撃する層と，virtue を賞讃する層とがこの詩にある．しかも，この二つの層は密接に結びつけられている．（ともすれば，諷刺は，非難，攻撃のみからなっていると考えられがちであるが，ドライデンのこの諷刺詩の場合はそうではない．）

この諷刺詩に即して具体的に議論をすすめてゆこう．

この諷刺詩の内容を一口で説明すれば，ある世界で，国王とその反抗者との間に戦いがたたかわれ，その結果国王が勝利をえる，といえる．ただ，反抗者と王との戦いぶりに力点をおく悲劇とはことなって，ここではむしろ反抗者の悪辣さに力点がおかれている．

この諷刺詩の世界では，善の代表者は国王であり，悪の代表は反抗者である．もちろん，この諷刺詩の話者（諷刺家と言ってもよい）は善に味方して，彼は反抗者を非難し，国王を賞讃する．そのことは読者にたやすくわかる．何故か？　その理由は，話者（諷刺家）の政治的立場を読者が容易にかつ判然と知りえるからである．

この諷刺家の政治的立場はどのようなものであったか？

彼は，この詩の 799 行から 810 行にかけて，彼の態度を明らかにする．「他のすべての過失は国家を乱すにすぎないが，革新は国家への致命的な打撃である．」[4]と彼は，革新への不信をしめす．さらに，建物の比喩を使って彼は議論をすすめる．「もし古くからある建物が傾いたり，倒れそうになれば，割れ目をふさぎ，控え壁で支えるのが人間の務めである．それ以上のことをするのは人間の限界を越えた，神聖冒瀆である．」[5]

このような伝統的思考法をもつ彼にとって，基礎を変え，枠を新しく作り直すのは，いやしい目的を追い求める反抗者のすることである．「反抗者は全体を破壊して部分を直す」[6]，いわば，「現在の病気を以前より一層悪く直す」[7]医者だと反抗者を，彼は非難する．

いわば保守的と言ってよい立場にあるこの話者（諷刺家）にとって，国王を頂点とする伝統的秩序は守るべき善であった．それに挑戦する反抗者は，彼にとって，それを破壊する危険な悪であった．

話者の立場のわかりやすさは，この諷刺詩で，誰が攻撃され，誰が賞讃されているかをはっきりと明らかにしている．この攻撃（と賞讃）の対象のわかりやすさは，この諷刺詩の特色の一つである．それは，この諷刺詩だけの特色ではない．総じて，ドライデンの諷刺は，どれもこの諷刺詩と同じ特色をもつ．*The Medal* でも *MacFlecknoe* でも，われわれは，攻撃対象を見つけるのに困難ではない．

このことは，スウィフトの諷刺，例えば *Modest Proposal* と対照させれば，よりはっきりとする．*Modest Proposal* においては，私には，話者の立場が見当つけにくい．アイルランド人の貧乏さを救うために赤ん坊を食べるように忠告する話者がどこまでまじめなのか（あるいは全部冗談なのか）わかりにくい．このわかりにくさは，また攻撃対象への見当のつけにくさともなっている．スウィフトは一体誰を攻撃しようとしているのか？　アイルランド人をか？　当時のイギリス政府をか？　それともそれ以外の誰をか？　これから比べれば，ドライデンの諷刺の攻撃対象は，きわめてはっきりしている．

ここで，諷刺における話者の役割について一言ふれる必要があろう．

私は，この諷刺詩の話者をドライデンとは呼ばなかった．それは，私がドライデン＝話者とすることに躊躇したからである．なぜならば，諷刺の話者は，あくまでもその諷刺のなかの一登場人物として彼自身を表わしている，と私は考えるから．いわば，この話者は，public の前で演技する演技者である．その演技を文字通りに受けとって，話者を Dryden as a man として受けとることはできない．私は，この話者を public の前で演技している Dryden as a satirist として受けとりたい．

話者（諷刺家）は，この諷刺詩で二つの面をもつ．その一は，すでに彼の政治的立場についての議論のなかでふれたのであるが，王の味方として活躍する public defender である．この諷刺詩を通じて主として活躍するのは，この面での彼である．彼が反抗者を悪の代表として攻撃するのは，彼の個人的な憎しみからというよりむしろ国王を擁護しようとする public な動機からである．

その二として，善良な市民としての面がある．この面での彼は，平和な統治の価値を十分に知り，過去の内戦を恥じている．彼は，また，王の友であるバルジライの息子の死を嘆き悲しむ．またあるときには，彼は，ジムリの滑稽さを笑う．この面（善良な市民としての話者）は，読者につぎのような印象を与える．すなわち，話者は，決して激しい憎しみやうらみにこりかたまっている人間嫌いではなく，同情心とユーモア（普通一般に使われている意味での）をもった良識ある人間であると読者は感じる．彼が良識ある市民であることは，彼が public defender であることとあいまって，彼の攻撃により大きな validity を与える．

Ⅲ

Absalom aud Achitophel では，ドラマと同様に，登場人物の言動によって，クウインタナの言葉をかりれば，[5] “satiric action” が展開される．それ故に，この諷刺詩は，dramatic satire と呼びえる．ドライデンは，この諷刺詩において，ある世界をつくり，そのなかで登場人物を活躍させて，彼の諷刺意図を伝えている．

ある世界とは，どのような世界か？

この詩の冒頭約10行で，われわれはその世界のあらましを知ることができる．時代（信心深くて，一夫多妻性が認められていた時代），場所（イス

ラエル），登場人物（ミカエル，ダビデ）から，それが旧約聖書のサムエル書におけるダビデの王国であることをわれわれは知る．

このダビデの王国で，ダビデの庶子のアブサロムは王座に就きたいという野望を抱き，ダビデに反抗するが，彼は敗れる．これがこの諷刺の situation である．

この想像上の situation のつくり方に二つの特色がある．

第一の特色として次のことが指摘できる．その当時における現実の situation（チャールスⅡの庶子モンマウス公が父親に背いて身を破滅させるという）がparallel に想像上の situation に移し変えられている．その両者間の関係は類似的である．それ故に，その両者間の対応関係は非常にわかりやすい．当時の読者には，ダビデが現実の誰を，アブサロムが誰を，アキトフエルが誰をさすのかすぐに理解できたであろう，と推測できる．この両 situation 間の対応関係のわかりやすさは，この諷刺にかぎらず，ドライデンの諷刺一般の特色である．

MacFlecknoe を一口で説明すれば，この諷刺詩は「馬鹿の国」（文学における）の王位継承を扱ったものである．若くしてその国の王位についたFlecknoeは老齢となり王位継承を考慮し，彼の多くの馬鹿な子供のなかでShadwell を最適任の後継者として任命する．このように，この詩の想像上の situation は現実の situation（'wit' を良しとする）とは正反対である．しかし，これは *Absalom and Achitophel* の現実の situation のひねり方とはことなるがこの詩においても *Absalom and Achitophel* の場合と同様にひねり方が単純であるために，現実と想像との対応関係はわかりやすい．*The Medal* にいたっては，想像上の situation は現実の situation がそっくりそのままあるにすぎない．そこには何等のひねりもきかせてないと言ってもよい．このように，現実と想像との対応関係の明白さは，ドライデンの諷刺の大きな特色の一つである．

このことは，例えばスウィフトの「ガリバー旅行記」の第四篇と比較されれば，一層はっきりするであろう．あの第四篇のわかりにくさ（そのなによりの証拠は，第四篇に非常に多くの解釈がなされていることにある）のもっとも大きな理由は，フウィナムの国が現実の situation に対応しにくいということ，つまり馬が現実の何をさすのかわかりにくいということにあると私は考える．

想像上の situation のこしらえ方の第二の特色は，聖書の物語が使われていることである．

R・F・ジョーンズの研究によれば，[9] ドライデン以前に，聖書物語が諷刺詩のなかで政治目的のためにしばしば使われていた．また，アブサロムのエピソードそのものも，チャールスⅡへのモンマウス公の反抗をあらわすために，ドライデンの詩があらわれる以前に，つかわれたことがあった．当時では，政治的騒乱がおこれば，その指導者は聖書のなかの反逆者にたとえて紹介され，攻撃された．聖書の反逆者のなかでもとくにアキトフェルの名前はよく知られ，彼は国王の敵 —— 不忠実な政治家 —— という反逆者の典型となった．一方，アブサロムという名前も，アキトフェルほどではないにしろ，よく聞かれた．彼は若くして野心家である王子の典型であった．しかも，当時では，アブサロム，アキトフェルという名前が一般に知れわたっていたと同様に，アブサロム＝モンマウス，アキトフェル＝シャフツベリという対比は幅広くかつ，たびたび使用されていた．また，ダビデ＝チャールスという対比は当時よく知れていたもので，ドライデン自身も *Astaea Redux* (1660) で使用している．

このように，この諷刺詩の situation は，当時では conventional なものであった．したがって，それは，当時の読者にとって既知なものであった．では，なぜドライデンは conventional situation を使ったのであろうか？ それはたんに偶然にすぎなかったのであろうか？ 私の考えでは，既知なものの使用にこの作者の積極的な意図がこめられていたと思える．というのは，conventional situation の使用によって，読者が登場人物の名前を聞くだけで，彼についての具体的イメージ（少なくとも悪人か善人かの）を思い浮べることを，作者は期待できた．このことは彼に利点を与える．たとえば，彼がアキトフェルの正体を詳らかに紹介しないで，アキトフェルに勝手な行動をさせても，彼は読者に誤解（アキトフェルが善人であるという）を与えることを恐れる必要がない．であるから，彼は situation が conventional であることによって読者に自分の作品の枠組みを容易に理解させることができ，そのことによって，枠のなかではあるが，彼は自由に動きまわることができ，彼の諷刺意図を徹底させることができた．

この situation の作り方は，独創性とは未知でユニークなものをつくりだすことだと考えるわれわれにとって，独創性を欠いだものと写るであろう．だが，この意味での独創性がドライデンにないからといって，彼を非難するのは見当ちがいである．彼の文学の根本態度が古典を imitate することであったドライデンにとって（しかしこれはあまりにも簡単にわりきりすぎた言い方ではあるが），以前しばしば使用された聖書物語を彼のコンテクストにぴったり当てはまるようにもちこみ，それによって彼の作品の意味の含蓄を豊かにし，より説得力をもたせて彼の諷刺を読者に伝えることこそ，彼の文学上のセオリーにしたがったものであった．

Ⅲ

以前，この諷刺詩の特色がその二重性にある，と私はいった．諷刺が悪の攻撃，善の賞讃の二重の層からなっているのは，なにもこの諷刺詩だけに限らない特色だともいえる．が，この諷刺詩においては，その二つが密接に結び合わせられて，一つの効果をはたしている．と同時に，善の代表が具体的な名前をもって登場する．しかもこの諷刺の major character としてである．（善の代表が主要な登場人物としてその諷刺のなかで表立って活躍する諷刺はそうざらにはない．）それ故に，この諷刺詩では善と悪との戦いが直接表面に出る，それとあいまって，悪への攻撃が手のこんだものとなる．

そこで，悪の攻撃と善の賞讃とのからみ合い方について具体的にふれたい．

（1）善賞讃は悪の代表によってなされる．ダビデ（善の代表）の徳は，この諷刺の話者（ダビデの味方）によってではなく，アブサロムとアキトフェル（彼等は勿論王の敵である）によって讃えられる．例えば，アブサロムは，ダビデがいかに統治者としてすぐれているかを語る．彼によれば，ダビデは「信仰の擁護者」で「人類の喜びの的」[10]であり，神もダビデを支持している．このように立派な国王ダビデに次のような讃辞をアブサロムは送る．

> If mildness ill with stubborn Israel suit,
> His crime is God's beloved attribute. (ll. 327-328)

この大げさともいえる賞讃（「神の最愛の性質」というこの誉め言葉以上のものはそうあるまい）は国王の味方から出たのではなく，彼の反抗者の頭の口から発せられたものであるために，彼の 'mildness' という virtue は一層強く読者の心に印象づけられる．と同時に，皮肉なことには，すぐれた国王にたてつくべき理由のないことをアブサロムは自ら認めざるをえない．間接的な方法によって，この賞讃はより大きな説得力をもって読者に伝えられる．

この間接的な方法は反抗者への攻撃のなかにもみられる．つまり反抗者の悪ぶりはこの諷刺の話者の口からではなく，反抗者自らの口からか，あるいはその仲間である他の反抗者の口からあばかれる．例えば，アキトフェルは，自らの口から，すべての人間に国王を嫌わせ，国王から人心を引き離そうとする彼の術策を高言する．

> All sorts of men by my successful arts,
> Abhorring kings, estrange their alter'd hearts
> From David's rule : • • • (ll. 289-91)

また，アブサロムは次のように発言することによって，彼の反抗がいかに不合理なものかを自らの口でばくろする．

> His (David's) favor leaves me nothing to require,
> Prevents my wishes, and outruns desire.
> What more can I expect while David lives?
> All but his kingly diadem he gives :
> And that • • •
> Is justly destin'd for a worthier head. (ll. 343-348)

彼の願いを何でも聞いてくれる父親に楯突くべき理由（いわば personal な理由）も，彼の欲している王冠は立派な人（少なくとも彼らよりは）のところへいくのだからあえてそれに反対すべき理由（いわば public な理由）も，アブサロムにはない筈である．personal であれ public であれ理由ある反抗ならば同情すべき点もあるのだが，彼の野心のための反抗には何

らの同情すべき点もない.

しかも，反抗に何らかの理由をつけようとするアブサロムの偽りは，彼の仲間であるアキトフェルによってすっぱぬかれる．アキトフェルは，次の後継者（ダビデの弟）が "the thin disguise of your arts" (l.443) を見抜いているから気をつけろ，とアブサロムに忠告する．しかし，この忠告はまずなによりもアブサロムの術策をばくろしている．"arts" という言葉は，O. E. D. の "trick, wile" という定義にまつまでもなく，この諷刺詩では非難のコンテクストのなかで使用されている[11]．このように，反抗者達は自らの手で自らの首をしめるという皮肉な立場にたたされる．

（2）悪への攻撃が善に傷を与えないような方法.

アキトフェルの portrait のなかで，彼は賞讃される．裁判官としてのアキトフェルは，鑑識眼があり，手がきれいで（比論的な意味での），賄賂をとらず，実行力がある．

> In Israels courts ne'er sat an Abbethdin
> With more discerning eyes, or hands more clean ;
> Unbribed, unsought, the wretched to redress ;
> Swift of dispatch, and easy of access. (ll. 188-191)

この賞讃は敵をも賞讃する諷刺家の fair な態度のあらわれである，と解釈できる．私も勿論その解釈に賛成である，が，別の解釈も可能である．（私の考えでは両方の解釈をすべきだと思うのだが．）

何故，この諷刺詩の最大の悪玉の一人ともいうべきアキトフェルは賞讃されているのか？　その第一の理由はさきにのべたが，第二の理由として，彼への賞讃は国王擁護でもあったと考えることができる．もし国王に任命された裁判官の無能力，悪人ぶりが攻撃されれば，その攻撃はまたそのような人物を裁判官に任命した国王の人を見る目のなさをあばくことになる．そのような暴露は国王を傷つける以外の何ものでもない．悪の代表はいくら傷つけられてもよいが，善のそれを傷つけるのは，この諷刺家にとっては，攻撃方法のまずさを意味する．すなわち，悪への攻撃は善を強

めるものでなければならない．

そこで，裁判官としてのアキトフェルが賞讃されることによって，悪人のなかにも美点を認めることのできる国王の公平な態度が印象づけられる．逆に，今度は，アキトフェルの反逆はそうした国王への裏切りを意味する．すなわち，国王に不当に扱われた人間が反逆に走るのは，まだ弁解の余地はあるが，国王に公平に扱われ，適任の地位を与えられている人間が反逆に走るのは，弁護する余地がない．このように，アキトフェルへの賞讃は，国王の公平さと彼の反抗の不合理性とを対照させるという効果を生む．

私の考えでは，アキトフェルへの賞讃にいま一つの意味を考えることができる．この賞讃には野心の危険についての警告がこめられている．アキトフェルは，裁判官としての彼の立派な態度のなかにみられるように，すぐれた人間になり得る可能性をもっていた．が，裁判官としての自分に満足できなくなり，国家を支配したいという政治的野心のために，後に自らの身を滅ぼす．当時のある pamphleteer がいっているように，[12] 野心は国家安全にとって危険であるばかりでなく，その個人にとっても危険である．アキトフェル（アブサロムにもあてはまるのだが）のようにその心のなかにすぐれたところをもちながらも，野心のため国家をと同時に彼自身の身を危ふくする．しかも，野心の危険は，ただアブサロムやアキトフェルのみの問題ではなく，国家を左右したいとねがう野望家すべてにあてはまる universal な問題である．したがって，この諷刺詩はすべての人に野心の危険を警告するという universal な面をもっている．

反抗者への賞讃はたんなる賞讃に終わるのでなく，その裏側に重大な意味がこめられている．言葉を変えていえば，反抗者を描写するときに，賞讃のなかに非難が含められるという方法が使用される．このことはとくにアブサロムへの描写に指摘できる．例えば，この詩の climax の一つをなしているアブサロムの行進について．アブサロムは，

> • • now begins his progress to ordain
> With chariots, horsemen, and a num'rous train ;
> From east to west his glories he displays,

And, like the sun, the promis'd land surveys.
(ll. 729-732)

この四行は，表むきには堂々としたアブサロムの行進を描写したものである．そのじつは，その行進が反抗のためのものであることが暗示されている．

「戦車や，騎兵や，無数の陪従をつれて」は，「アブサロムは，車や馬を自分のために整え，その前に走る五十人の者供を備えた．」[13]という旧約のアブサロムの反抗のための行進を想起させる．旧約のアブサロムのそれと同様に，この詩のアブサロムの行進も反抗のための第一歩である，とこの行は暗示する．

上の引用の第四行目の「太陽」という直喩は，アキトフェルが，「西の空に沈む」[14]といってダビデを太陽に擬えた場合とあわせて考えれば，国王をあらわすための比喩であることがわかる．国王として公に認められてもおらないアブサロムが国王としてすでに振舞っていること（これはとりもなおさず反逆的行為である）を，この行は暗にしめしている．

国王を守ろうという名目のために始められた，この人目を引くアブサロムの行進は，見た目には“pomp”としかみえないが，じつは別の目的を偽装したものであった．[15] すなわち，彼の行進は，国王守護を口実に，反抗という目的を偽装したものであった．

その行進への結論として，その行進への強い非難で，行進への描写がしめくくられる．

Thus in a pageant shew a plot is made,
And peace itself is war in masquerade. (ll. 751-752)

アブサロムの行進が反抗のための仮装であったように，彼への讃辞は，じつは彼への非難の仮装である．

ドライデンの諷刺は一つの要素からでなく，複数の要素から構成され，それらが両面をなしている．したがって，われわれは前面のみを見て，彼の諷刺を判断するのでなく，前，後面をみ，それらが一つとしてなしている効果をくみとる必要がある．また，その両面性は，彼の諷刺の意味の

層を厚くし，彼の諷刺をすぐれたものにしている．

（3）悪の善攻撃によって善が傷つかない．何故，そうする必要があったのか？　たとえそれが反抗者であろうとも，国王の明白な欠点をあげて反抗者に攻撃させれば，王の味方さえも王の欠点を認めたことになる．そのことは味方にとって不利な武器を敵に手わたすことである．したがって，反抗者は国王の必ずしも欠点でないものを，それがあたかも欠点であるかのように攻撃させられる．しかも，それが欠点でないことは明白であるため，その攻撃によって反抗者は自ら傷つく．例えば，ダビデの老齢をアブサロムはからかっているが，老齢は必ずしもその人の欠点とはいえない．王党派の第一位者バルジライは "crown'd with honor and with years" (l. 818) だと賞讃されている．

また，アキトフェルは，ダビデの mercy について歯切れの悪い皮肉をあびせている．

> Not that your father's mildness I contemn ;
> But manly force becomes the diadem.
>
> ・　　・　　・　　・
>
> For lavish grants suppose a monarch tame,
> And more his goodness than his wit proclaim.
>
> (ll. 381-386)

アキトフェルは，悪口を意図して上の passage を発言したのだが，それは必ずしも悪口としては聞えない．当時，mercy は，支配者がもちえる最高の徳であると考えられていた．また，ドライデンが，この詩の序文のなかで，神は無限に "merciful" である，といったように，それは神のもつものであった．神の属性でもある，誰がみても明白な徳を，アキトフェルは国王の欠点として攻撃する．このように皮肉にも，反抗者の国王への批判は王の徳の賞讃となっている．

（4）悪と善は決して対等に扱われない．この諷刺詩のしめくくりとして，ダビデは反抗者に断を下すために演説をおこなう．その演説(86行に及

ぶ）のなかで，彼はアキトフェルをほんの二，三言でかたづける（二行しか言及しない）．反抗者の中心人物であるアキトフェルは，ダビデにとって，非常に危険な人物であった筈である．それにもかかわらず，ダビデはただ一言皮肉な調子で彼に言及するだけである．

そのために，この演説は anti-climax であると非難する人がある．しかし，そうでなく考えることもできる，と私は思う．この詩の作者は，善の賞讃，悪の攻撃という二重の狙いをもっているのであるから，彼は，敵を攻撃するときに，その攻撃のみに専念することができない．それと同時に，彼は味方守護をせねばならない．ダビデの演説に限っていえば，ダビデがアキトフェルを激しく攻撃すれば，その激しさの度合いにつれて，アキトフェルはダビデと対等勢力，あるいは，ダビデが全力をあげてぶっつからねばならない相手だ，とダビデが認めたことになる．その結果，アキトフェルの地位が高まる．そこで，ダビデは，アキトフェルが彼にとってとるにたらない人物であるかのように皮肉で軽く交わす．この諷刺詩の二重性という点から判断すれば，必ずしもダビデの演説は anti-climax ではない．むしろそれはドライデンの巧みな技巧をしめしている．

この諷刺詩の一つの大きな特色は，反抗者という悪の代表への攻撃と，国王という善の代表の擁護という二重性にある．この二つのものは，密接に結びつきかつ微妙に絡み合っている．そのため，この諷刺詩の意味の含蓄が豊かになり，また，その意味の層が厚くなり，それを大きな一因として，この諷刺詩はすぐれた諷刺となっている．

〔注〕

① Mark Van Doren : *The Poetry of John Dryden*, (1946)

② "Discourse Concerning Satire", *The Poetical Works of John Dryden*, ed. Geoge R. Noyes (1937), p. 303.

③ *Ibid.*, p. 306.

④ ll. 799-800.

⑤ ll. 801-8.

⑥ l. 808.

⑦ l. 810.

⑧ Ricardo Quintana : "Situational Satire : A Commentary on the method of Swift" , in *The University Of Toronto Quarterly* XV11 (1948) , p. 130.

⑨ Richard F. Jones : "The Originality of *Absalom and Achitophel*" , in *Modern Language Notes*, XLV1 (1931) , pp. 211-218.

⑩ l. 318

⑪ l. 228, l. 289, l. 482, l. 498, l. 1016.

⑫ *Absalom's Conspiracy : Or, The Tragedy of Treason,* (1680)

⑬ Ⅱ Samuel xv. i. (関根正雄氏訳による)

⑭ l. 268.

⑮ l. 740.